



丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第12回

明田重次郎

明田兄弟の弟重次郎は、安政五年（一八五八）一月生まれ、兄吉五郎とは二歳違いです。二人は「兄弟でありながら性格風采ともころりと違っていた。兄は太肉のがっちり堂々とした体格、性格はすっきりお大名肌で、



明田重次郎(1858～1928)

ぜいたくで物惜しみをせず、豪放磊落で決断力に富み、酒もよく飲んだ。弟の方は長身瘦軀、きわめて謹直な性格で細かいことにもよく気がつき、思いやりが深く、世にも珍しいほどの世話好きであった。しかしさすがにお大家育ち、物惜しみをせず微塵もケチケチしたと

ころのなかったことは兄弟共通であった」「兄弟仲人も羨むばかりよかった。兄は愛弟のために惜しみなく財を分かつて立派な家を建て、兄弟の家は道を挟んで門を向き合っていた」と伝わります（『明田重次郎伝』村島渚編）。

前回述べたように二人は自由民権運動への参加やキリスト教入信など常に行動を共にしました。兄が遊蕩にふけたときには重次郎も「お付き合いぐらいのこ」とはしたようです（同上書）。

蚕糸業組合長二四年間

吉五郎が須知村長に就任した明治二二年、重次郎は船井郡蚕糸業組合組合長に就きます。三一歳でした。

明治一九年に京都府下では郡ごとに十一の蚕糸業組合（組合員総数四万余）が結成

されました。船井郡は南桑田郡と共同で事務所を須知村に置き（二二年に分離、後に事務所も園部へ移る）、組合長に吉田健次郎が就任しました。しかし運営は難航し二十年に吉田は辞任、次の平田熊次郎も三ヶ月で辞任して前田英吉に代わりました。

当時須知村外八ヶ村連合戸長役場の用掛だった重次郎は、前田に強く乞われて二二年四月組合書記に就任し、翌二二年四月からは組合長となって、以後大正二

年（一九一三）まで七期二四年間その職にありました。

重次郎が組合長だった時代は、日本蚕糸業の「黄金時代」で、船井郡においても重次郎の奮励もあって最盛期を迎え、特に和知が主要産地となりました。

若き日の友金（辻原）光治

が蚕糸技術を学んだのも下和知村坂原の新生社でした。光治は三二年から船井郡蚕糸同業組合に入り重次郎の下で技手兼教師となります。

栄進社の破綻と後始末

重次郎は終生金銭的に苦しみましたが、その原因のひとつは栄進社の破綻によるものでした。

栄進社は、明治二十年、山本喜蔵（上和知村初代村長）を社長として上和知村に設立された製糸会社でした。和知篠原と園部上本町に製糸工場を持ち、「船井郡の成繭八割以上を購買」するまでに成長しますが（『和知町誌』）、四一年からの糸価大暴落に抗しきれず、四三年一月に破産します。

重次郎は保証人となっていたため園部銀行からの借入金をそっくり背負うこと

になりました。この頃すでに明田家の財産は大方が失われていましたが、重次郎はグチひとつこぼさず、死の前年の昭和二年まで二十年かかって完済しました。

親友波多野鶴吉

栄進社の二工場は、重次郎と波多野鶴吉の連携により郡是製糸に吸収されます。重次郎と波多野は、「まるで瓜二つといったような同形同質の人で、同じ安政五年、地方切つての名家の次男として生まれ、同じころにキリスト教に入り、蚕糸業に志し」たことや、若いころ自由民権運動に加わった

し合い歩調を合わせていました。船井郡では郡是への對抗意識もありその軍門に下ることは反対も強かったのですが、重次郎は郡内に製糸工場を確保する必要を確信し、親友が経営する郡是に託したのでした。その後、和知工場は昭和二三年まで、園部工場は同一六年まで操業しました。

家族へのあこがれと信仰

重次郎は明治十九年に兄吉五郎とともに宣教師グリーンから洗礼を受けました。その翌年には母うさ、妹とも、吉五郎の妻つるも受洗しています。二二年に重次郎は東加舎村（亀岡市本梅町）から妻りんを迎えますが、りんも前年に受洗していました。りんは一男二女を生

「全くウマの合った仲良し」でした（村島前掲書）。二人は早くから何鹿郡・船井郡の組合長として信頼

でなくなりますが、三六年、三六歳でなくなりますが。重次郎は

同年、後妻に美穂を娶り、居を曾根から園部へ移します。美穂の父は、園部藩の儒者で丹波聖人といわれた上野盤山（一八三九～一九一五）です。

重次郎は、文字通り「敬虔なクリスチャン」でした。「神ご自身がここにおいてになって…」というのが口癖で、聖書の「我はぶどうの木」の一節を愛誦しては常にキリストの忠実な弟子たらんと努めました。暁天祈祷会にはまっ先に来て拭き掃除をし、火鉢に火を熾して皆を待つような人でした。

犠牲と奉仕の生涯

大正二年に組合を退職しますが、退職金は借金の返済に充てましたから遊んで暮らすわけにはいかず、肥料や苗木を扱う問屋を始めました。肥料も苗木もよく

売れましたが、「人を傷つけてはいけない」といって代金を催促しません。多数の貸し倒れができ、なかには数千円も溜まってしまつて国外へ逃げる者がありました。だが、重次郎は気の毒がってその世話をしました。

郡是梁瀬工場（兵庫県朝来市）に大量の漬物大根を納入したときには、品質が悪かったと聞いて梁瀬まで返金に行っています。

一時、酢酸製造をやったこともありましたが、何をやっても得るより失う方が多く、大正五～六年には全てやめてしまいました。

重次郎は若いころから常に病弱で、様々な健康法を試していましたが、大正六年秋、大阪の小山善太郎というクリスチャンから血液循環療法を受けたところ奇

跡的な効き目がありました。神の摂理によるものと感謝した重次郎は、この療法を習って病弱者を救うことを決心して小山に教えを乞い、ついにその秘法を習得しました。口の悪い郷里の人々には「明田さんもうとうとう按摩屋にまで落ちぶれた」などといわれましたが、本人は一生懸命でした。施術の旅は、長男のいる東京から大阪、さらには朝鮮、満州にまで及びました。謝礼は道中の費用程度しか受け取りませんでした。

昭和三年（一九二八）九月十八日、妻と長男夫妻、三人の娘らの讚美歌と祈りのなか、七十歳で息絶えました。死後に船井郡蚕糸業組合が建立した頌徳碑が現在、園部公園小麦山山頂にあります。（山下幾雄）